
† 李陽 † の短編・中編集

† 李陽 †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

†李陽†の短編・中編集

【Nコード】

N4741V

【作者名】

†李陽†

【あらすじ】

【魔科学錬金術師Rio】ユニーク1万アクセス突破記念として、短編や中編の話を思いつきで掲載していきます。

連載小説という形を取っていますが、実際は短編・中編の置き場だと思っってもらって結構です。

暇つぶし程度に読んでみて下さい。

H a p p i l y E v e r A f t e r (1) (前書き)

ネタが降りて来たので書いてみました。

H a p p i l y E v e r A f t e r (1)

一九歳の夏、専門学校も小中高と同じで夏休みがある。私が通っているIT関連の学校にもそれはあった。

小さい頃からのオタク趣味もあって、女だてらにシステムエンジニアなんか目指しちゃってる訳ですが、そんな学校には高校で知り合った女の知り合いは一人もいなくなっていた。

でも、それは私にとって寂しいことでは無い。むしろ好ましいとも言える。私は人とのつながりが大嫌いなのだ。嫌いと言っても出来ない訳ではない、愛想笑いも出来るし、流行りのファッションだって人並みの知識はある。美的感覚だって、一般人に合わせた考え方もできる。むしろ、オタク知識を発揮して自作したアクセサリーを付けて行こう物なら、しばらく人気者にすら成れた。なんとも簡単である。

そんな高校生活に嫌気が差していた私は、受験時に勉強したくないこともあってIT系の専門学校に進学することにした。周囲の友達もどき達は、私と別れることをとても残念だと言っていたが、そんな嘘はつかなくても良い。高校生活で出来た俄友達^{にわか}なんて、少し連絡を取らないだけで簡単に関係が切れる物だ。現に、私の携帯は専門学校に入ってから一カ月もすると、高校時代の友人もどきの人間からはトンと連絡が来なくなった。もちろん、私から連絡しないことも大きな要因だと思えるが、むしろ関係を切りたかった私としては、なんで電話してくるんだよ。と思っていたので、やっと連絡が途絶えて喜んでいくくらいだった。

携帯電話が鳴らなくなって既に二カ月、同じ学校の友人からの誘いも何かしら理由を付けて断って来たのだ。既に私は、専門学校で完全に一人になれるベストポジションに対して、王手を掛けられる一歩手前まで来ていた。

そんなある日、不意に私の携帯が鳴った。私に連絡をしてくるな

んで、どこのどいつだ？ と携帯のディスプレイを見てみる。そこには、私の携帯に唯一登録されている雄おすの名前が表示されていた。

『長谷川ユウスケ』なんで下の名前がカタカナなのかと言えば、私が中学時代にハマったアニメの表記が、名字は漢字で、名前がカタカナとい表記だったからだ。中学生の時、携帯電話が普及し出した。基本的には必要の無いアイテムだったが、過保護な親が持たせるのだ。なんとも迷惑な話である。そんな物、持っているところを目撃されようものなら、途端に寄って来ては『見せて！』だの『番号交換しよ！』だの馬鹿な学友共は友達のフリをしたがるのだ。

面倒くさいと思いつつも『長谷川ユウスケ』の着信に応えることにする。この雄おすは、中学、高校と同じクラスが六年も続いた腐れ縁なのだ。流石にそれだけの年月同じ教室で生活し、話す機会もそれなりにあれば、私の人間嫌いを知っている数少ない本当の友人だと言える程度までにはなる。なにより、人間嫌いの私が気兼ねなく話すことが出来るのは、この雄おすくらいの物なのだ。

「何？」

私は素っ気なくも簡潔かつ完結に要件を聞いた。こんな下らないことに時間を割くくらいならば、今私が携帯を握っている手をコストの裁縫作業に戻してやりたいからだ。

「うわ！ 相変わらずだな。そんなに俺が嫌いか！？ 違うか？ 人間が嫌いなんだもん？」

無駄に長く、しかも要領を得ない返答を返してくる『長谷川ユウスケ』に対して、軽く怒りの感情が込み上げてくる。携帯を握る圧力を上げることで、軽くストレスを発散させ、怒鳴りたい衝動を抑えていた。

「それで？ 何？」

「なははあゝ悪い悪い。そんな邪険にするなって、六年間も一緒に過ごした仲じゃないのさ」

「早くしないと切る」

「分かった！ 分かったってえ！ 全く面倒くさい奴……」

誰よりも貴様が面倒臭い。

「まあゝ用ってのはさ、これから少し出て来れないか？」

「はあ？ アンタ馬鹿あ？ とでも言ってもらいの？ 私がこの時期、外に出る訳ないじゃない」

「その台詞には、この瞬間に最大限『萌え』させて貰った訳だけども、ちよつとな……お前に見せたい物があんだよ」

「何？」

「それは来てからのお楽しみ！ んじゃゝ駅前のマグドナルドに集合な！ 今から一時間後！ 今が一〇時三四分だから……一・一・時三四分な！ <ブツツ――>」

なんとも厄介な事である。こんな誘われ方をされては行かない訳にはいかない。何より気になるではないか……

私は朝起きてから、ずっと着ていたタンクトップとハーフパンツを脱ぎ捨てると、流行のファッションを身につけ、軽く化粧して一番強力な日焼け止めを肌に塗りたくる。私は肌に何かを塗ったりするのが大嫌いなのである。だから基本的にはコスプレをする時以外の化粧も大嫌いだ。腕時計も嫌いだし、ネックレスも嫌い。唯一ピアスは付けていても大丈夫なので、普段から着用している。用意を終えるのに一五分程度、高校時代の友人もどきが一度の準備に三時間掛かると言う馬鹿がいたが、ハリウッドもビックリな特殊メイクで遊びに来た時は、吃驚すると同時に納得もした。たしかに、三時間掛かるわ。だって、誰だか分からなくなってるし。

日差しが高熱線を放射する中、少し大きめの日傘を差しながら歩く私のファッションは、白くてふわふわのファッションである。時代はエロ可愛いファッションらしいが、男に媚びを売るような性格では無い私は、本来の趣味に近い服を愛用していた。馬鹿な男が寄ってくるのが嫌だったが、どうしようもない馬鹿はエロ可愛いファッションに群がるので、それよりは十分マシだとも言えた。

二、三度馬鹿な男に声を掛けられたが、なんとか逃げて約束のマグドナルドに到着した。店内は空調が効き過ぎているくらいに冷えている。外を三〇分も歩いて来た私には天国だった。

アイスコーヒーを頼んで飲みながら待っていると、約束の十一時三四分ピッタリに『長谷川ユウスケ』が現れた。こいつはこういう奴なのである。

「よっ！ 待ったか？」

「一〇分くらい」

「お前来るの早過ぎだから」

「『長谷川ユウスケ』が時間ピッタリ過ぎるだけ、普通は男が先に来て待つもの」

「いや……夢じゃん？ 女の子と待ち合わせして『待った？』『ううん！ 今来たところ！』って」

「私に求めるのが間違い」

「ってか、ちと待ってて！ 俺も何か買ってくるわ、昼時だし腹減った！ お前は？ 何か食うか？」

「テリヤキバーガーのセット。飲み物はコーラ。もちろんオゴリよね？」

「呼び出しちゃったからなく。オゴってやるよ！ ってか、そんな白い服でテリヤキって勇者だな！ 本当にテリヤキで大丈夫か!？」

「大丈夫だ。問題無い」

「……ウルズ1了解」

私は、眉間に皺を寄せて言い放つ。

「フルメタ違う、エルシャダイ」

「それ知らない。じゃあ、テリヤキのセットな」

エルシャダイを知らないということは、なんだかんだ言っても『長谷川ユウスケ』もリア充野郎ということか、そんなことを考えながら視線を外に向ける。外を歩く人達は、みんな一様に『夏だ！プールだ！ お目目が真っ赤だ！』と言わんばかりのプール帰りとみられる小学生や、糞暑い中絡めるように手を繋ぐバカップル。みんな夏してるねえ……私は、夏コミに合わせてコス衣装の仕上げに追われているというのに、こんなところでマグドのアイスコーヒー飲んでる場合じゃない。早く要件を済ませて帰ってしまいたい。夏コミまで二週間を切ったのだ。

『長谷川ユウスケ』がトレイを二つ持って帰って来た、店内が忙しいのか？ 普通は番号札を渡されて、席で店員が持ってくるのを待つのが通常スタイルのはずである。

「何故自分で持ってきたの？」

「ん？ ああ、俺、先月までここでバイトしてたんだ！ 裏方だったから知ってる人少ないけど、元従業員だから自分で持ってけってさ、酷いよねえ」

「マグド食い放題羨ましい。このリア充め」

「リア充って何？ それにその発想ってケーキ屋さんになりたい幼稚園児と一緒にだろ」

「それを聞く時点でリア充確定。幼稚園児と同じ思考回路は否定しない」

「？そこは否定しとこうか。とりあえず、食おうぜ！俺、腹減ったよ」

『長谷川ユウスケ』はビッグマグドのセットを頼んだようだ。あんな大きな物、よく食べる気になる。アレを食べようとすると、間違ひ無く手にタルタルソースが付いてしまうか、服を汚すことになる。私自身、食べるのが下手というのもあるけど、あれを上手く食べる人を今まで見たことがない。

私はテリヤキバーガーの包装紙を上手く使って、小出しにして食べる。自分の口が小さいことは分かっている。要領良く食べなくては、白い服に茶色いソース模様を付けることになってしまう。今更になってチーズバーガー辺りにしておけば良かったと後悔していた。視線を上げて『長谷川ユウスケ』を見てみると、どんだけ大きく開くんだよ、その口は！？ とツツコンでしまいたくなるような大口で、ビッグマグドを頬張っていく。私が半分も食べ終わらない内に『長谷川ユウスケ』は食べ終わってしまった。

見てるだけで、胸ヤケしてしまった。テリヤキバーガーはまだ半分以上残っているし、フライドポテトに到っては二、三本しか手を付けていない。

「もういらない」

「ちよっ！ おまつ！ 俺がオゴツたのに、盛大に残してんじゃねエ！」

「もういらない」

「はぁ……じゃあ、俺が貰うからな！」

「それはちよつと……」

「お残しは許しまへんでエえええ！！！」

名物給仕オバサンの名言を声高に叫んだ『長谷川ユウスケ』は、私の静止を振り切って食べかけのテリヤキバーガーを頬張る。別に関節キスとか、そんなことを気にするような玉ではない。ではないのだが……食べかけの、しかも直接口を付けるタイプの物だ。たとえ六年間一緒にいるような腐れ縁でも異性であれば遠慮して欲しい

物である。

そんなことを考えながら、顔が少し熱くなるのを感じた。この店、空調が弱くなっているのでは無いか？　でも、冷え性の足元は極寒にいるかのよう^にに冷え切っている。ということは、直射日光が原因に違いない！　紫外線遮光ガラスを導入するべきだ。外を見てみると、夏特有のゲリラ豪雨が降っていた。

「ありゃーこりゃ止むまで外出られないな」

「そうね」

私の顔はどうしたというのだ！？　オーバークロックでCPUが熱暴走を起こしかけているのか！？　それとも筐体内にゴミが溜まっているというのか？　定期的なメンテナンスが不可欠だぞ！　だが、慣れない人はPCの蓋を外すことも覚束^{おぼつか}ない。いざとなったら電気屋さんに頼んだ方が得策だ……何を言っているのだ……私は………いよいよ熱暴走が本格化してきたに違いない。昨夜はエアコンを付けたまま寝たから、夏風邪を引いたのだ！　そうに違いない！　夏風邪かあー夏コミ近いから、早く帰って薬飲んで寝なきゃだな。

早く自宅へ帰還する為には、目標を即座に撃破し離脱する必要がある。目標は『長谷川ユウスケ』、奴が呼び出したことであり、それを完遂しなければ帰還することは叶わない。即座に行動へ移す必要がある。

私は、先を急ぐ為に『長谷川ユウスケ』へ問^{ただ}い質した。

「それで？　電話で言ってた『見せたい物』って何？」

私は何かを期待しているのだろうか、顔の熱がさらに上がったように感じる。

「ああ、そうだな……そろそろ時間だな」

そう言って携帯を取り出して、なにやら操作をしている。

携帯電話の中に入っているのだろうか？ 私の中に巣食う厨二病患者が暴れ出すのを感じる。

――＜携帯ディスプレイ＞――

六年前から好きでした。付き合ってください。

とか、出てきたらどうしよう。まあ、たしかに六年間も懲りずに一緒にいた馬鹿はコイツだけだ。付き合ってくれと言われたら――
客かではない。

顔の熱がさらに上がるのを感じる。もう私はダメかもしれない。そう思った次の瞬間、『長谷川ユウスケ』が立ちあがった。

私は、咄嗟に力いっぱい目を閉じていた。いきなりか？ いきなりなのか？ 私は、初めてなのだぞ？ しかし、来ると思われていた物は何も来ない。私は恐る恐る目を開けると、私の後ろの方角、マグドナルドの間取りでいうと入口方向に向かって手を振っている。

「おい！ こっち！ こっち！」

私は小首を傾げていた。なんだ、違うのか……残念。なんだ？ 残念って……もしかして、私は『長谷川ユウスケ』のことを……

「紹介するよ。コレ、俺の彼女！ マグドでバイトしてる時に知り合ってた、付き合い出したんだ！ コイツ、ほら前に話したじゃん六年間ずっと一緒のクラスだった腐れ縁の――」

「初めまして、ユウスケの彼女してます。ってか、この子超可愛い！ 白くて細くて顔も小ちゃい、髪もサラサラだし！ 人形みたあゝい」

私は、視線を上げて『長谷川ユウスケ』の隣を見る。そこには、私が嫌いなエロ可愛いファッションを着た少し色黒に焼いた雌めすが立っていた。

「『長谷川ユウスケ』彼女……出来たのか………オメデトウ……コイツ、こんな奴だけど……大切にしてくれ………そ、それじゃ！」

私は、今どんな顔をしているのだろう、上手く笑えていたのだろうか。

気が付くと、私は家路についていた。日傘を持ってくるのも忘れて徒歩三〇分の道を歩いている。肌を突き刺す様に照らす太陽が、今はむしろ心地良い。涙の代わりに全て汗で水分を流せたら良いのに……

いつも幸せに気付くのは失ったその瞬間だ、いつも後手後手。そこで先手を打てる人間こそ、幸せになる為の切符を手に入れられるのだ。

私は自分の気持ちという券売機にすら気付くことは出来なかった。あの雌めすは券売機で切符を手に入れて、電車に乗ることが出来た。私は出来なかった、それだけのこと。

今、私の目から溢れ出る涙が、いつか券売機に気付かせてくれることを祈るとしよう。まずは『長谷川ユウスケ』を思い出にすることからだ。

H a p p i l y E v e r A f t e r (1) (後書き)

どうだったでしょうか、一人称、しかも女性視点（変わった子）。
少しでも楽しんで貰えたなら本望です。

Happily Ever After (2)

家に辿り着いた私は、靴を脱ぎ捨てると階段を駆け上がった部屋へと逃げ込んだ。階下から母親が『ただいまくらい言いなさい』と叫んでいるが、今の私には返事をする気力も無い。

しかし、濡れた服のままでは夏コミ参加を控えた私にはタブー中のタブーだった為、なけなしの気力で着替えを始めた。肌張り付き脱ぎにくくなった濡れた服は、引き千切りたくなるほどのストレスを私に与えていた。いっそ引き千切ってみようか、そのまま部屋で暴れ回ってみようか、そうすればこの行き場の無くなった自分でも処理のしようがない感情を少しでも納めることができるかもしれない。でも、私にはできなかった。オタクを愛する私には、部屋に置いてある貴重なフィギュアや本、ゲームを手には掛けることはできない。

そうだ、ゲームでストレスを発散しよう。私の愛する戦国武将で、雑兵共をバツバツタと薙倒^{なぎたお}して行けば、少しは気分も落ち着くかもしれない。何より、普段の生活で発生したストレスは、アニメを見て涙を流したり、爽快なゲームで大暴れしたり、そんなことをすれば大抵のことはスッキリしたのだ。私は服を脱ぎ捨てて、出掛ける前に着ていたタンクトップとハーフパンツを着用すると、部屋に置いてあったハンドタオルで髪を拭きながら、S A N Y製のゲーム筐体の電源を入れた。ディスプレイにゲームソフトを丁寧^{丁寧}にセットし、オープニングムービーをしっかりと見てから、ストーリーモードを選ぶ。操作武将には、愛用の武将『直江兼続』^{なおえかねつぐ}を選択した。私はこの『直江兼続』と『前田慶次』^{まえだけいじ}二人の友情が好物なのだ。忘れもしない中古本屋で巡り合った一冊の漫画。自由奔放な『前田慶次』が主人公の古い少年コミックだ。その漫画のエピソードで直江兼続が見せた男っぷりに私のオタク魂は最高に燃え上ってしまった。それ以来、戦国武将物には目が無くなった私は、生来のオタクに加

えて歴史関連まで入ってしまったハイブリッドになっていたのだ。幸か不幸か、私はまだ腐っては居ない。だが、それも時間の問題なのかもしれない。

私は、一心不乱に何度もクリアして攻略手順まで完全に頭に入っているストーリーモードで名のある武将だろうが、雑兵だろうが薙倒して戦果を重ねて行く。クリア評価は『S』。まあ、当然だな。次のステージに進んだところで私の手が思わず止まった。私が操作する『直江兼続』の目の前に居た武将の名前が『長宗我部元親』ちようそかべもとちかだった。私の眼はおかしくなってしまったのかもしれない『長宗我部元親』が何故か『長谷川ユウスケ』に見えたのだ。そんな馬鹿な：『長』しか合っていないではないか。私の手が止まっている間に『直江兼続』のヒットポイントが雑兵によって削られていく。頭では理解している。でも、私の手はゲームをする為に動くことは無かった。『直江兼続』が断末魔の悲鳴を上げてうつ伏せで倒れる。私もベッドの上でうつ伏せになって倒れ込んでいた。

私はしばらく『長』の字は見られないのかもしれない。早くなんとかしなければ、日常生活にすら支障をきたす事態だ。なんとかしなければならぬと考えている内に、私は精神的な疲労で眠りについていた。



中学二年の春、 「好きです。付き合ってください！」 「無理」。

中学三年の夏、 「前から気になってました。付き合ってください！」 「無理」。

「お前って無愛想なのにモテるよなあ。どいつもコイツも物好きだよなホント」

「ウルサイ黙れ 『長谷川ユウスケ』」

高校一年の秋、「付き合ってください!」「面倒くさいから無理」。
高校三年の冬、「ずっと好きでした。付き合ってください」「ゴメンなさい」。

「お前、昔に比べたら人と話すの普通になってきたよなあ」
「ウルサイ黙れ『長谷川ユウスケ』」

「高校入ってから随分告白されたよな?」

「そうね」

「コイツとなら付き合っても良いって奴いないのか?」

「そうね」

「……なんなら俺と付き合ってみるか?」

「そうね……——っ!」

「マジか!?!」

「う、嘘よ。たまたま流れで応えちゃっただけ! 誰が『長谷川ユウスケ』なんかと!」

「そうだよな〜お前が誰かと付き合うとか想像出来ないわ。あ〜あ、失恋しちったなあ〜」

「誰が……『長谷川ユウスケ』なんかと……」



私はベットから飛び起きた。時計を見ると晩飯時だ。階下からはおいしそうなショウガ焼きの匂いが漂ってきている。お母さんグツグツジョブ。じゃなくて、今の夢って高校の時の? 第三者的視点だったのは、何かの罰ゲームか? っていうか私って昔、『長谷川ユウスケ』に告白されてたの!?! 何やってたの当時の私!?! 傍^{はた}から見ると、私って確実に『長谷川ユウスケ』に惚れてるパターンの反応してるじゃないの!?! ツンデレか!?! デレたこと無かった

から気付かなかったけど、私ってツンデレなのか！？ 昼から続くオーバークロック処理に私の脳が焼き付けを起こしかけたところで、階下の母親から『ご飯出来たから降りて来なさあゝい！』と声が掛かった。その声で我に返った私は『はあゝい』と返事を返すと、数回深呼吸をして息を落ちつけてから一階のダイニングへ向かった。

ダイニングのテーブルには、すでに家族が所定の位置に着席していた。テレビが一番見える所にお父さん、その隣の動きやすい席にお母さん、お父さんの正面に兄貴、そしてお母さんの正面に私という具合。私の家族は基本的に仲が良い。私と兄貴の年齢が四つ離れていることもあってか、不仲に成り易いという兄妹仲も良い方だと思う。お父さんとお母さんは過保護気味だと思うけど、基本的には放任主義で人に迷惑を掛けなければ文句を言わない人達だ。見た目は、顔のつくりは良い方だと思う。お父さんのおじいちゃん、つまり曾お祖父ちゃんがドイツ人だったらしく、その血の所為か肌は白くて髪の毛も若干色素が薄めだ。お父さんは、その影響がモロに出ていて少し堀の深い顔立ち。何故、背だけ日本人規格に収まってしまったのか謎だ。お母さんは、純正日本人で秋田出身。肌は白く、背も低い。現在54歳にも関わらず、大学時代のプロポーションを維持している強者である。兄貴は、お父さんとお母さんの良いところと言った見た目で、色白の肌、一七八センチという日本人平均より少し高い身長。反則的な上半身と下半身の比率。中性的な顔がコンプレックスという、羨ましい人間だ。ちなみに、私と同じでオタク、男の人では割と少数派のコスプレをする側の人間で夏コミも一緒に行く予定である。中学二年の時以降、毎年兄貴と一緒に夏コミへ参加している為、迎え盆むかえぼんは両親だけに任せている。二人もデートが出来るから調度良いという、良い歳してバカップル振りを見せてつけてくれる、ある意味理想の夫婦だ。

私が席に着くと、兄貴が目敏めびとく私の寝癖を発見する。

「お前、豪快なアホ毛が立ってるぞ。週刊少年漫画の主人公みたい

に」

「ウルサイなあゝ寝癖だよ！　ね・ぐ・せ！　出掛けて帰ってきたら眠くなっちゃってさあ」

『出掛けて』と自分で言った時に、少し胸にジクリと痛みが走ったような気がした。

私は、外で会話をする時は無愛想な感じになるけど、家族と話する時は到って普通の女の子になる。意識している訳では無いのだけど、自然とそうなってしまうのだ。私の人間嫌いが原因なのは間違いないのだが、こればかりはどうしようも無い。

「そっか。でも、そういう系統も悪く無いかもな。今年は、アレだっけ魔法少女のヤツ……『シニカル☆ひなた』の『デステニー』だっけ？」

「そう、兄貴は『ラストファンタジー』の『レイン』だよね？　もう一四年も前の作品なのに根強い人気だよなぁ」

「ファンの人がまた『レイン』でお願いします！　ってブログにコメントくれるからなあ……冬コミでは、違うのやっちゃったし、今回は期待に込めてやらないと」

「今回彼女さんは来ないの？」

兄貴には付き合って一年半くらいになる彼女がいる。ブラコン氣質が少しあった私は、最初戸惑ったけど、彼女がかなり良い人ですぐに打ち解けた。それ以来、兄貴より仲が良いかもしれないくらい連絡を取っている。同性で言えば、家族を除いて一番私のことを理解している人だと思う。

「来るぞ、今年も一緒に『ラストファンタジー』で統一したんだ。『ファティ』やって貰うんだあゝ」

「彼女さん、髪長くてスタイル良いから絶対似合うよね！　一緒に

写真取らせて貰おっと」

「『ラストファンタジー』と『シニカル☆ひなた』でコラボか、なかなかシュールな絵だな……」

「お母さんとお父さんは毎年恒例のデートを楽しんでくるから、晩御飯は無いわよ？ 外で食べてらっしゃいね」

「ゆっくり、帰って来なさい。なんなら泊まりでも良いぞ、ハッハッハッハ」

「この歳で弟も妹も欲しく無いからね」

「ホントに勘弁してくれよな」

家族との会話や触れ合いは、私の痩せた心に少くない栄養を与えてくれた。考えてみれば、目先の目標があるというのは気を紛らわせるのに絶好のアイテムである。当面の目標である夏コミ参加の為、コスを完成させて兄貴と彼女と私でオタ達の視線を釘づけにしてやるんだから！ それに兄貴の彼女なら、私の今の気持ちを相談出来るしね……悩んでも解決出来ないことは悩まない！ 気持ちちは切りかえられなくても頭くらいは切りかえなくちゃね！

それからしばらく、私は外に出かけるのを必要最低限にするという制限を掛けた。その理由は、コスの完成まで追い込みに入っていたこともあるけど、何より『長谷川ユウスケ』と雌^{めす}に遭遇しない事がメインだった。

何度かコスの材料買出しの為、町へ出ることもあったが『長谷川ユウスケ』と似た格好、似た髪型を見つける度に胸にジクリとした痛みが走った。こんなことで、思い出になて出来るのだろうか……見つけたく無い。見つかりたく無い。そう思いながらも、姿を探している自分に気が付いて嫌気が差す。自分が何をしたいのか分からない。……ダメダメ！ 考えても答えは出ない！ 今は夏コミ用のコスを完成させることが重要！ そう自分に言い聞かせ、夏コミ

前日の金曜日、小物に付けるボタンが不足したためソーイングショップに向かった私の目に映ったのは、目的の店の斜向かいにあるエロ可愛い系ファッションを扱う洋服店で、雌の買い物に笑顔で付き合う『長谷川ユウスケ』の姿だった。

男が女のカバンを持ってやるんじゃない！ 男の癖に女物の店にいて恥ずかしく無いのか！？ 人前で手を繋ぐんじゃない！ 頭撫でられて嬉しそうにするな雌！ 私は、言葉に出来ない負け惜しみが私を中心に螺旋を描いていくのを感じた。あの夢で見た、アレは妄想だったのかもしれない。でも、もしも……あれが本当にあった出来事だったなら、あの時、私が自分の気持ちに気が付いていたなら……あそこで、頭を撫でられて嬉しそうな顔をしているのは私だったかもしれないのだ。

私は、睨むように見つめていた自分に気が付くと、急いで目的の材料を購入して逃げるように自宅へと走って帰った。

ダメだ！ ダメだ！ ダメだ！ こんなんじゃない、いつまでも忘れることなんて出来ない！ 意識しないようにすると逆に意識してしまう、見たくないのに見てしまう、忘れたいのに考えてしまう、そんな無限ループに捕まってしまった私には、今の苦しみから逃れることが出来るなんて考えられなかった。

私が息を切らして自宅の前に辿り着くと、兄貴が運転するワインレッド色のR32スカイラインが家の前に停車する所だった。扉を開けて出て来たのは、私が家族以外で唯一心を許せる同性、兄貴の彼女だった。

私は乱れた呼吸のまま、兄貴の彼女に抱きついていた。

「こんなに息を切らせて、そんなに私に会いたかったの？」

「コイツ、お前に懐いてるからなあ……兄貴としては少し寂しいけど。昔は、『お兄ちゃんと結婚しゅるう』って可愛かったのに」

「ウルサイ。バカ兄貴……お姉ちゃん、少し話がしたいんだけど良いかなあ？」

「良いわよ。そしたら、荷物を置いてからお部屋に行くね。待って貰える？」

「うん……」

兄貴の彼女から離れた私は、化粧を落として顔を洗うと部屋へ戻って待つことにした。

何から話せば良いのか……私は何が話したいのか……考えが纏まらない内に、兄貴の彼女が私の部屋にやってきた。

「私と話したい事って、いわゆるガールズトークってことかな？」

若い子の話についていけるか心配だわ」

「お姉ちゃん勘が良いね……実はね……——」

私は、二週間前『長谷川ユウスケ』から呼び出された時からの経緯を、途中つかえながらも、声が震えないように努めて話した。涙も零れたし、汚いけど鼻水も出てしまった。努力も虚しく嗚咽を漏らしながらの説明になってしまったから、兄貴の彼女がちゃんと聞きとれたのか私には分からない。途中からは整理された話じゃ無く、思いつくままに口が動いていたようにも思える。私がこんな話を聞かされたら『面倒くさい。自分で考えろ』と突き放してしまふこと間違いない。

気が済むまで口を動かした私は、涙と鼻水でグシャグシャになった顔を上げた。兄貴の彼女がキレイなハンカチでそれらを拭きとってくれる。テンプレかもしれないが、そんなキレイなハンカチで鼻まで嘔ませてもらってしまった。

「女の子だねえ……かなり遅めの初恋だったみたいだけど……誰も悪く無いだけに性質が悪いね。夢で見た光景が本当だった場合、今まで飼いきれぬ目の目に合ってた『長谷川ユウスケ』君も可哀想だけど、全然なびく気配も無いんじゃないに目移りするわよねえ。手を

出しても到底敵わない呂布りよふより、なんとか勝てそうな華雄かゆうを狙うわよね虎牢関こうらかんの戦いは序盤の見せ場よねえ〜でも結局は関羽かんうに良いとこ持ってかれちゃうんだけどね〜」

全くもってその通りなのだが、そこまで核心を突かれると言い返す言葉も無いほど、ずっと自分が『長谷川ユウスケ』に辛い思いをさせていたことに気付かされる。それに三国志の話を出されても呂布りよふと関羽かんうは分かるけど……華雄かゆうって誰？ それにその話って関係あるの？

「そうねえ……私がアドバイス出来るとしても、在り来たりな事しか言えないわよ？ まずは一つ目、諦めて新しい恋に生きる！」

若い内は出会いも腐るほど一杯あるから。あ〜でもでも、変な男に引っかけちゃダメよ？ 続いて二つ目、時間が解決してくれる！

考えるなつてのも無理でしょうし、どうでも良くなるのを待つしかないわね。そして最後、楽しい事を探す！ ある意味、一つ目

も二つ目も最後のも統一して言えることは、諦めるなら忘れるしかないってこと。好きって気持ちだね。『長谷川ユウスケ』君を忘れるのは無理でしょうし、相手も友達付き合いを止めるつもりはないでしょうから。後は、逆に諦めないとか？ 『長谷川ユウスケ』

を本気で振り向かせるっていうのもあるけど、お勧め出来ないわね」
「私も一瞬は考えたけど、私には出来ないかな……自信も無いし、今更って感じがする……忘れられるかな？ こんなに苦しいのに……」

「人間って案外強いよ？ 私も学生時代とか、いろいろあったなあ〜……凹むこともあったけど、今はこうしてあの人と付き合ってる訳だし？ 今は辛くても後で、それ以上の幸せが待ってるの。辛い時こそ一つ頑張れば、幸せになれるのよ。漢字ってよく出来てるわよね〜」

「頑張るって……何を頑張れば良いのかな……」

「んゝ……まずは、人間嫌いの克服かしらね。じゃないと新しい恋も出来ないし、私とこうして仲良くなれたんだもの、きっと他の人でも大丈夫だよ」

「……私にはかなり難しいかも……」

「難しい事を頑張れば達成した時、それに見合うだけの幸せが待ってる。頑張らましょ？」

「……うん」

「まずは、明日の夏コミで人間嫌いを克服ね！ 極端な人が多いけど、それに慣れれば一般人なんて雑魚同然！」

「へへっ……雑魚同然って酷過ぎ。それに夏コミに来てる極端な人って、私達も同類だからね」

「たしかに」

「「あははは」」

「やっとなったね」

「……本当だ。なんだか久しぶりに笑った気がする」

「やっぱり笑った顔が一番可愛いわよ？ あの人の妹だけあるわ」

「何の気なしに人の兄貴で惚気ないでよね」

兄貴の彼女と話した事で、私の中で燻^{くすぶ}っていた何かが少し晴れた気がした。人に相談できるというのは凄い。だから高校時代の友人もどきは、何かと群れていたのかな？ 私は、なんでも一人で解決できたし、人との関係も希薄だった。相談するほどの問題も起きなかったから相談する人間の必要性を感じ無かったんだ。あの頃、一緒になって悩んだり、馬鹿やったり、下らない事で笑ったり、下品な下ネタにもついて行ければ、いろいろ違う今があったのかもしれない。少し前までは考えられないような内容で後悔している自分に少し驚いた。

そして、私は夏コミ当日を迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4741v/>

†李陽†の短編・中編集

2011年8月25日03時26分発行